問題提起と一つのアプローチ

日本化学会　学術情報部　林　和弘

2004年10月19日(火)

緊急シンポジュウム
「どうする日本の学術誌！

国産欧文ジャーナルの必要性

1. その国で行われる研究の発表の場
   → わが国の研究状況･水準を世界にしめす舞台
2. 国の知的財産を確保する場
   国が生み出した1次情報を国が保持する
   ことの大切さ → 国益保護
3. 世界における日本の文化, 地位そのもの
   → アーカイブは国の文化財
4. 日本の学問の自己評価能力を育成する場

2004.2.27 日本学術会議特別シンポジウム（村橋 俊一）より

緊急シンポジウム
「どうする日本の学術誌！」

日本の学術誌の問題

A　学会（出版）の問題

手弁当サロンの限界　若い研究者が投稿してくれる日はいつ？

B　研究者の問題

誰が何のために発行しているのか

C　図書館の問題

図書館職員が「Librarian」としてジャーナルを選定できる日が来るのか

D　行政，社会の仕組みの問題

Excuseとしての引き合いになりやすい

マネジメント能力（運用の現実）

コスト意識

統計解析力

ビジョン（を作成するサポート）

電子ジャーナルの誕生･その利点

世界の流れ

- 1995年頃(web公開)　1998年頃 (web投稿査読)
  2001年頃　(相互リンク)

早く知りたい
調べたい
関連情報に素早く到達したい

利点

- どこでも論文が読める
- 冊子体より早く論文が読める
- 検索ができる
- 引用文献のリンク
- 動画･音声など電子付録の挿入

E-Bookははやらないのに,
E-Journalは何故はやるか？

冊子では不可能
電子化のデメリットを超える

Chemistry Letters

投稿から掲載まで30日を切る国際的な速報誌
1972年創刊　3000部（海外800部弱）

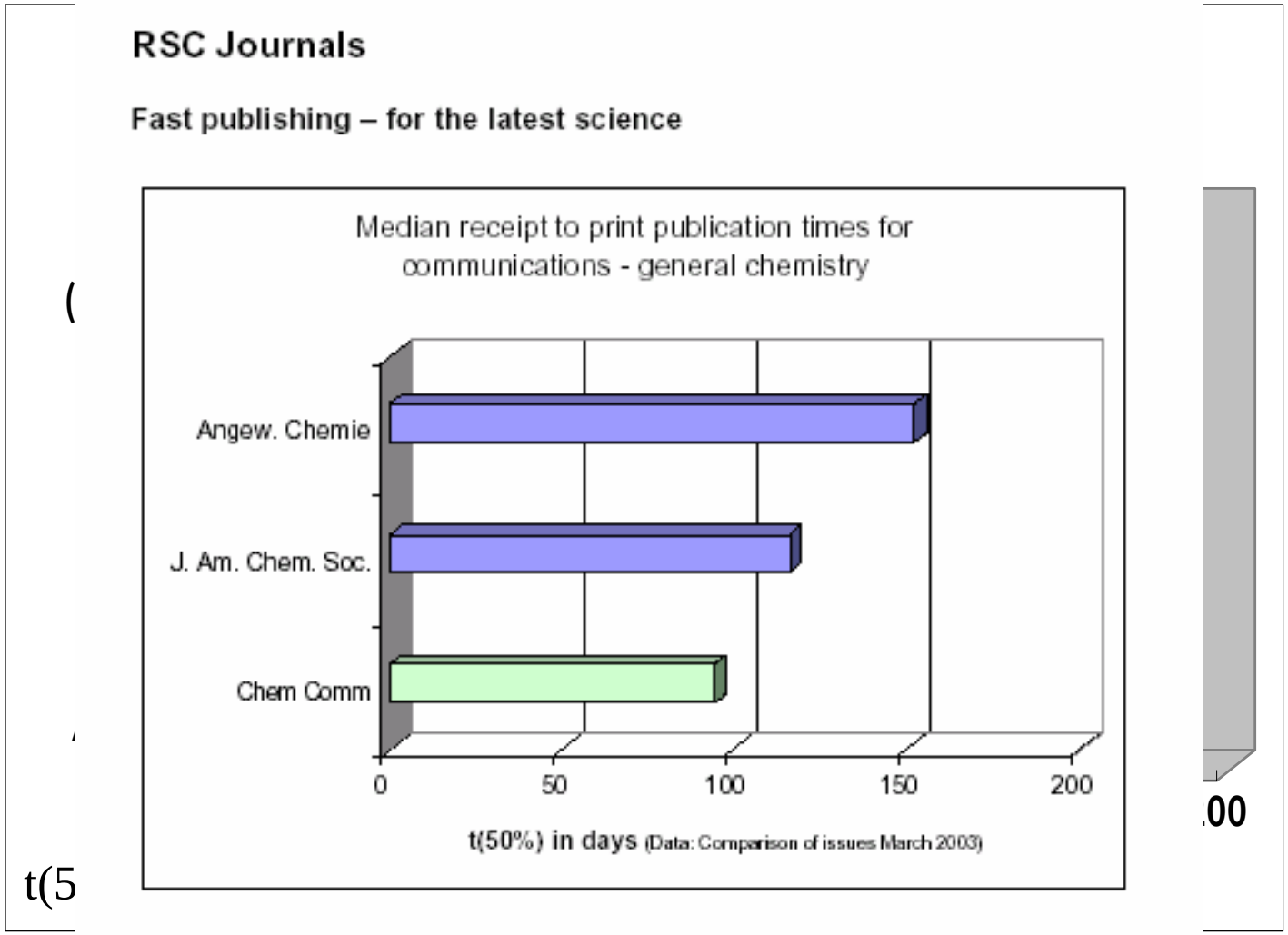
１９９８年まで　原稿の切り貼り組版による速報性の追及
1998年-2001年　電子化を検討開始と自サーバーによる公開

2002年　J-STAGEによる全文公開の開始
2003年　Advance View（印刷前web公開）の開始
電子投稿の開始　DOI、web公開日の記述
図つき目次無料カラー化
コンテンツアラート（目次email配信）
2004年　本格的な電子査読開始

速報性を高める

緊急シンポジュウム
「どうする日本の学術誌！

一般化学雑誌の速報誌との比較



(http://www.rsc.org/pdf/journals/times_publication.pdf)

2004年では？ Web掲載までの期間は？

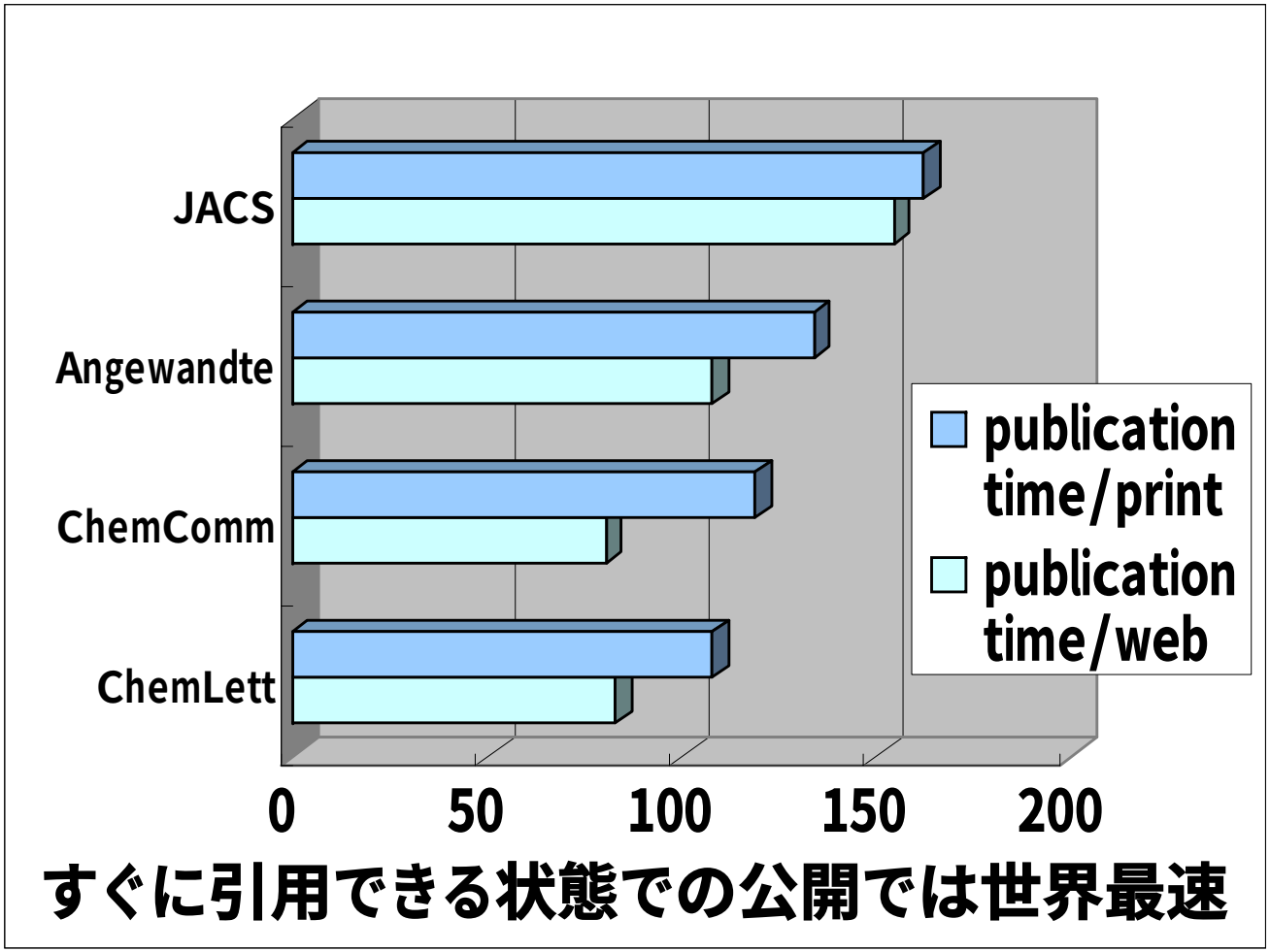
Publication time

	ChemLett	ChemComm	Angewandte	JACS
Impact Factor	1.579	4.031	8.427	6.516
no of articles	178	340	381	268
publication time/web	83	80.5	108	154.4
(witn page number?)	yes	no	no	no
publication time/print	108	119.2	134.1	162.3

average in days (Data: Comparison of issues January-March 2004)

印刷前web公開，電子投稿開始の影響

一般化学雑誌の速報誌との比較2

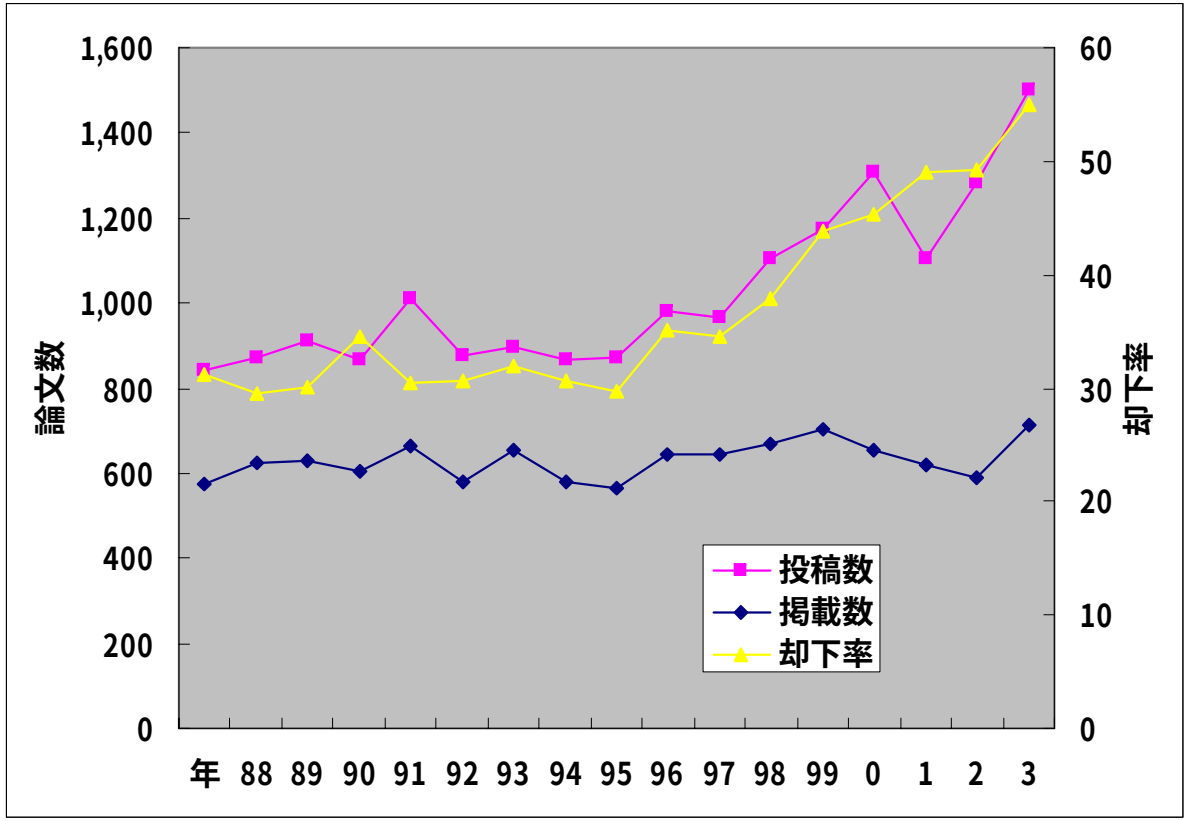


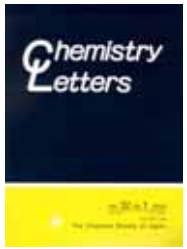
average in days (Data: Comparison of issues January-March 2004)

電子査読開始後は？ 2004.10**月号のデータ**

緊急シンポジュウム
「どうする日本の学術誌！」

投稿･掲載件数，却下率の推移





(2004年は1-6月のデータを元にした見込み)

2004年1-10月：海外投稿率は51%に
却下率も上がり，質の良い論文に絞り込む

緊急シンポジウム
「どうする日本の学術誌！

雑誌出版の収支構造

- **収　入**
  購読費　81%　(図書 (海外59%, 国内14%) , 個人21%, 法人6%)
  投稿料 (別刷り代)　8%
  補助金　10%　(アーカイブ)
  広告収入その他　あって無いようなもの
- **支　出**
  基礎データ (版下と電子ジャーナルデータ) 作成費　19%
  冊子印刷送達経費　15%
  別刷り印刷送達経費　2%
  電子ジャーナル公開経費　0%　(J-STAGE利用)
  編集経費 (委員会経費)　9%　(ボランティア的)
  事務経費 (含む人件費)　55%
  販売促進費　0%　(余地がない)
  (プロモーション不足→次の資金が生まれない,
  の悪循環)